

令和 5 年 6 月 5 日現在

機関番号：23804

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00158

研究課題名（和文）明治前期の日本の信号ラッパ 英仏の影響と西南戦争における運用の実態について

研究課題名（英文）Japanese Military Bugles in the Early Meiji Period: British and French Influences, and their Operation during the Seinan War of 1877

研究代表者

奥中 康人（OKUNAKA, Yasuto）

静岡文化芸術大学・文化政策学部・教授

研究者番号：10448722

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：(1)明治初期に陸軍で用いられていた複数のラッパ譜に基づき、同時代のフランスにおけるラッパ譜と照合しつつ、どのような楽曲が用いられていたのかを検証した。その際、フランスのラッパ譜には存在しない楽曲（合図、行進曲）は、日本で作成された可能性のあるものと推定することができた。(2)アジア歴史資料センターDB等により、明治の早い段階から陸軍工廠において国産ラッパが製造されていたこと、および明治10年代より民間でもラッパ（金管楽器）が製造されていたことを明らかにした。(3)同DBの西南戦争資料から、「喇叭暗号」という使用法を手掛かりに、西南戦争における具体的な運用の実態を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで、日本における西洋音楽受容の歴史は、芸術音楽や学校音楽に偏ってきたが、これまでほとんど放置されてきた軍隊におけるラッパ（Bugle）という側面から、より早い時点での洋楽受容の実態を明らかにした。また、音楽研究では作曲家と音楽作品についての調査研究が重視されてきたが、本研究では金管楽器製造という観点からの調査研究も含むもので、日本における楽器製造の歴史としても意義を持つものである（もちろん、日本における西洋楽器製造の歴史的研究として、オルガン、ピアノ、バイオリンについては充実しているが、金管楽器については見過ごされてきた）

研究成果の概要（英文）：(1) Based on several bugle notations used by the army in the early Meiji period, I verified what kind of music was being blown by the army, by comparing them with bugle notations in France of the same period. I was able to presume that tunes (signals, marches) that do not exist in French bugle notations may have been created in Japan. (2) The Asian Historical Resource Center DB and other sources revealed that domestically produced bugles were manufactured at army arsenals from the early Meiji era, and that private companies also manufactured bugles (brass instruments) from the latter half of the 1880s. (3) From the same DB documents on the Seinan War, we clarified the actual situation of specific operations in the War, using the usage of the "Bugle Code".

研究分野：音楽学

キーワード：西洋音楽受容 ラッパ 金管楽器 楽器製造

1. 研究開始当初の背景

幕末維新期に導入されたラッパ(喇叭、Bugle)は、日本において早くから普及していた西洋楽器(金管楽器)でありながら、その受容の実態はほとんど解明されないまま放置されてきた。要因は、ラッパを「楽器」とは認識してこなかった音楽研究者の視野の狭さもさることながら、そもそもラッパについての資料が不足していたことによるところが大きい。

しかしながら、近年になって整備されたデジタルアーカイブ(国立公文書館アジア歴史資料センターや国立国会図書館のデジタルコレクション)等を活用することにより、膨大な未知の歴史的資料にアクセスすることが可能となり、西南戦争時のみならず、明治期のラッパをめぐる様々な側面を明らかにすることができるようになった。

2. 研究の目的

本研究では、断片的な記録をコンテキストに従って整合的に配置する作業を通し、さらには、同時代の英仏のラッパ譜との照合によって、これまでまったく不明であった明治前期(つまり、1885年に刊行された『陸海軍喇叭譜』より前の時期)に演奏されていた軍隊ラッパの楽譜・レパートリー(個々のメロディ)その使用法、機能や役割、ラッパという金管楽器の製造や供給、ラッパ手などを明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 国立公文書館アジア歴史資料センターのデータベースを用いた「喇叭」に関する文書・記録の分析。

(1-1) ラッパ製造に関する文書・記録の分析。

(1-2) 西南戦争におけるラッパに関する文書・記録の分析

(1-2-1) 楽器としてのラッパの製造・流通についての文書記録。

(1-2-2) ラッパ手についての文書記録

(1-2-1) ラッパのレパートリーについての文書記録。および「喇叭暗号」について。

(2) フランスの国立図書館所蔵の19世紀ラッパ譜を分析することにより、当時のフランスにおける軍隊ラッパのレパートリーを確定する。また、現存する明治初期の陸軍の4点のラッパ譜: 野口吉右衛門ラッパ譜(1876)[宮代町郷土資料館所蔵]、渡辺三四郎ラッパ譜(1882)[個人蔵]、政狩金助ラッパ譜(1883-84)[偕行文庫所蔵]、中島兼重ラッパ譜(1885)[静岡文化芸術大学所蔵]を分析することにより、日本陸軍におけるラッパ譜のレパートリーを確認し、フランスの喇叭譜と照合する。

(3) 楽器製造・販売業界の業界誌、『楽器商報』『ミュージックトレード』の記事、および明治期の内国勸業博覧会等の記録に基づく、明治期の民間楽器製造者の整理。

4. 研究成果

明治初期における陸軍ラッパのレパートリーについて

日本で最初に編纂・刊行された『陸海軍喇叭譜』(1885)より前に陸軍で用いられたラッパ譜のおおよその輪郭を把握することができた。1885年以前の4点のラッパ譜は、いずれも刊行された譜本ではなく、手書きの(場合によっては判読が極めて困難な)楽譜であり、それぞれを丁寧に照合する作業によって、当時の軍隊ラッパのレパートリーの全貌を見通すことができた。

従来は、資料中に記載されているタイトル「アツペル」や「オーシャン」など数曲の存在が知られていただけであったが、少なくとも当時のラッパ手は50~70曲程度の合図(ラッパ信号)を共有しており、それらを修得していたらしいこと、またラッパによる行進曲は数百小節をこえる長い楽曲が存在し、その中には二重奏、三重奏で演奏する行進曲も含まれていたことが判明した。

それらの多くはフランス陸軍で用いられていたラッパ譜をそのまま用いたことも確認できたが、必ずしもすべての日本のラッパ譜が、フランスのラッパ譜の中に見つけることができるわけではなく、いくつかの曲については(とりわけ行進曲については、大部分が)、出所・起源が分

からないものがある。一般に、命令を伝達するラッパ信号は、勝手な改変が許されない厳格な性格を有しているものであるが、それとは対照的に、行進曲のような楽曲については、行進をするための「二拍子」を提供すればよいだけなので、即興で作り出されることもあったと考えられる（お雇い外国人のラッパ教師が作ったのか、あるいは日本人が作ったのか、あるいは作曲なのか、アレンジなのかも分らない）。

また、複数の日本のラッパ譜を検証すると、明治9～18年の間に、微妙に旋律が異なっていることも指摘できる。これについては、意図的に変更した結果なのか（たとえばラッパ手の吹奏を容易にするため）、意図的ではなく口頭伝承にありがちな一種の誤伝・転訛、筆写ミスによるものなのかは一概には判断できないが、たとえば6/8拍子が2/2拍子に改編されているような例は、前者とみなすことができる。二重奏・三重奏の行進曲が存在したことから、同じ種類（おなじキーの）のラッパが存在していたこと（前提として同種のラッパを供給することができ、かつ部隊にはそれが存在していたことが前提であったこと）も窺える。

日本におけるラッパ製造

日本における西洋楽器の製造について、従来はオルガンやピアノ、バイオリンに関心が偏りがちで、ラッパのような金管楽器については十分に調査されることなく、放置されてきた。例えば、檜山陸郎『楽器産業』（1977）のようなガイドブックに記載されていることが、とくに批判的に検証されることなく信じられてきた。

檜山は、『いろは新聞』の記事（を証拠として取り上げた石井研堂『明治事物起源』）を根拠として、1884年に大阪ではじめて国産ラッパが作られた（それまでは、すべて輸入品であった）としたが、国立公文書館のデジタルアーカイブ、アジア歴史資料センターの膨大な資料を分析すると、（すでに中村理平が指摘した）富五郎なるラッパ職人の存在、そして遅くとも1871年には、御用商人、井上七兵衛から試作品のラッパ（英式をモデルとした銅製のラッパ）が、英式太鼓、英式小太鼓とともに海軍に納品されており、翌年には国産の英式のラッパ、仏式のラッパが製造されていたことが明らかになった。明治7年には、陸軍で少なくとも一か月に数十管以上の生産可能であったことを窺わせる資料も残っている。

また、これとは別に、和歌山では明治3年ころにはカール・ケッペンの指導の下で独自にラッパが製造されていた（明治4年に薩摩藩でも製造したという文献もある）。

民間のラッパ（金管楽器）製造

軍のラッパ製造から派生する形で、民間の金管楽器製造業者が製造を始めることになる。初期の製造業者として、浅草北元町の宮本勝之助が（その初期には陸軍の下請けをしていたか、あるいは陸軍で働いていた）1875年ころには独立してラッパを製造しており、1877年の内国勲業博覧会には「銅英吉利型」と「真鍮仏蘭西形」の二種のラッパを出品している（のちに日本管楽器を創業することになる江川仙太郎は、宮本のもとで働いていた）。

少し遅れて、和歌山県出身の江名常三郎が大阪でラッパ製造に着手し（正確な年代は不明だがおそらく上記『いろは新聞』（1884）の報道と推定される）、1890年の第三回内国勲業博覧会にもラッパを出品、第四回内国勲業博覧会では「コントロールバース」や「アルト（ホルン）」などを出品している（檜山（1977）は、ピストンやバルブを備えた金管楽器について、1890年代前後から1900年頃に江川仙太郎が最初に製造したと述べているが、これについても誤りである）。

江名のもとで働いていた上野為吉（江川と同じ世代）は、第四師団の後援によって1897年に大阪島の内に上野管楽器を開業する。当初はラッパの製造だけのようであったが（第五回内国勲業博覧会にラッパを出品）、日露戦争の頃からホルネットやトランペットを製造するようになった。

東京の江川仙太郎については、情報量が多いものの、逆にそれぞれの情報が錯綜していることから不明確な点が多い。おそらく、江川は宮本勝之助・陸軍工廠を経て、1892年頃に独立。金管楽器の修理とラッパ製造をはじめたが、トランペットやホルネットなどを製造するようになったのは明治1902年頃と思われる。1907年の東京勲業博覧会では、ヘリコンバス、小バス、バリトン、アルト、ホルネット、トロンボーンを出品している（1918年に中山隆次が新潟の資産家、伊藤成治から融資を受け、合資会社日本管楽器に、1937年には日本管楽器株式会社となり、1970年には日本楽器製造（現在のヤマハ）と合併する）。

東京においては、明治40年に田辺鐘太郎が三田の軍楽器製作所（東京軍楽器製造、明治30年創設）を引き継ぎ、大正初期に田辺楽器製作所と改称した（これについても不明瞭な点が多く諸説ある）。

西南戦争におけるラッパ運用の実態

アジア歴史資料センターのデータベースを用いて、西南戦争（1877）に関する資料・記録（主に「陸軍省大日記」の「西南戦役」資料群）から「喇叭」等の文字が記載されている資料から抽出された約320件は、ラッパという楽器について（約60件）、ラッパ手について、ラッパ信号についてのデータ（約240件）におおよそ分類することができる。

本研究（上記「日本におけるラッパ製造」）により、西南戦争時にはすでに国産ラッパが製造されていたので、輸入されたラッパも存在した可能性はあるが、これらの文書に記録されている

(政府陸軍が用いた)ラッパは国産と考えられる。該当する 60 件のデータにはラッパがどのように手配され、運搬され、九州にいる政府軍の手に渡ったかを示すものが多い。戦地に送られたラッパは数十～百単位で、当時のラッパ製造量をうかがうことが出来る。

ラッパ信号についてのデータは、個々のラッパ信号(ラッパ譜)の具体的なタイトル、あるいは、特定のラッパ信号を示唆する(たとえば「進撃ノ号音」のような)記述が多数あり、そこからフランスのラッパ譜のメロディを特定することが可能である(「進撃ノ号音」は LA CHARGE)。ここから明らかになったラッパ譜は、本研究の研究成果「明治初期における陸軍ラッパのレパートリーについて」によって判明した当時の(ラッパ手が所持していた楽譜に掲載されていた)ラッパのレパートリーと重複している。また、楽譜に記されていた「楽マルス」や「坂マルス」等の行進曲は、西南戦争の終盤に、鹿児島でこれらの曲を練習したことが記載されているので、単に楽譜に掲載されていただけでなく、実際に吹奏されていたこと(当時のラッパ手たちに吹奏できる技量があったこと)を確認できる。

ラッパ信号についてのデータの過半数には「喇叭暗号」という、戦地に於ける敵・味方識別の合図が用いられていたことが記載されている。1877 年 5 月末から 7 月にかけてのデータを集中的に分析すると、実際には「喇叭暗号」はうまく運用することができず(もっとも、うまく運用できた事例は記録されていなかった可能性もあるが)、逆に各地でトラブルを引き起こしていたことが明らかになった。

「喇叭暗号」を巡る混乱からみえてくるのは、敵・味方識別のために、ひとつの部隊にラッパとラッパ手が必ず常備されていた(もちろん、ラッパ手は、複数のラッパ信号を吹奏できなければならない)こと、しかし、命令を出す尉官たちはラッパについての知識をそれほど有していたわけではなかったこと(だからトラブルが頻出した)、そして何よりも、唱歌教育が学校で始まる前に、多くの兵士たちがラッパによって吹奏されるドミソの三和音を聴いていたこと、が判明した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 奥中康人	4. 巻 23
2. 論文標題 明治期に金管楽器を製造していた人々について 『楽器商報』『ミュージックトレード』の記事、および内国勲業博覧会記録等の分析を通して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 静岡文化芸術大学紀要	6. 最初と最後の頁 11 28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 奥中康人	4. 巻 22
2. 論文標題 『陸軍喇叭譜』（1885）制定以前の陸軍フランス式ラッパ譜について（2）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 静岡文化芸術大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 19 - 36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 奥中康人	4. 巻 21
2. 論文標題 西南戦争で陸軍が用いたラッパ信号と「喇叭暗号」を巡る混乱	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 静岡文化芸術大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 242-226
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 奥中康人	4. 巻 20
2. 論文標題 明治初期の金管楽器製造について 国立公文書館アジア歴史資料センター所蔵文書の分析を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 静岡文化芸術大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 51-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 奥中康人
2. 発表標題 軍隊ラッパはどのように用いられたのか？ 西南戦争における陸軍の喇叭暗号をめぐって
3. 学会等名 日本音楽学会中部支部第129回定例研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------